

「サーファーズ」にお別れを

そして僕らは永遠のアイコンを失った。

文：ジョージ・カックル

2025年11月、サーファーズ逗子の閉店によって、僕たちは本当に大切な文化的アイコンを失うことになる。そこは海沿いのさまざまな「トライブ」たちが集う場所で、彼ら自身の手によって生まれた。特別で、スピリチュアルなエネルギーに満ちていた。その雰囲気があったからこそ、都会から来た人たちも気取らずに、ビーチコミュニティの真の空気を感じることができた。僕たちはそこに行けば、きっと誰かしら海の仲間に出会えた。どんなに訪れる人が都会的になっても、サーファーズはつねに湘南コミュニティの「集いの場」だった。

オーナーは成瀬一郎。通称ナル。彼はかつて金沢文庫で「ザ・ロード&ザ・スカイ」というロックが流れるロードハウスを経営していて、その後、逗子海岸へと拠点を移した。「Umi no Ie(海の家)」というコンセプトを考えたのは、ヌマさんこと、みんなから慕われる地元サーファー、沼田光博。彼はゴアやバリのような雰囲気、足もとに砂があり、目の前に海が広がり、夕日を眺めながら一日を締めくくれる、緩やかなバー&レストランを思い描いていたという。

最初の店舗建設は2009年6月に始まり、翌7月に完成した。すべて地元のサーファーたちによってつくられたんだ。波のない日は、僕たちは逗子海岸に集まり、ビーチの上にサーファーズを築き上げていった。近くのビーチからもたくさんの仲間が手伝いに来てくれた。有料で働く人もいれば、僕のようにボランティアで働く人もいた。まあ、正確には「ボランティア」というよりは、その夏の飲み代と引き換えに働いていたんだけどね。正直、僕のほうが得をしていたと思う。

日本の「海の家」文化は経済的にシビアだ。6月に建設を始め、7月1日のオープンを目指す。営業は8月末までで、9月にはすべてを解体し、木材を保管して翌年に再利用する。できるだけコストを抑えるためだ。年を重ねるごとに建物は進化し、必要な資材も、労力も、そして関わる人々の思いも増していった。

逗子海岸での5年間を経て、サーファーズは湘南でも屈指の波が見渡せる断崖の上に新しい居場所を見つけ、そこから足かけ12年間、誇り高く立ちつづけ



夜な夜な繰りひろげられたライブパフォーマンス。湘南のローカル・ヒーロー、ザ・テストライダーズ結成40周年記念ライブの盛り上がり

た。そのロケーションは息をのむほど美しかった。海に向かって開かれ、地平線が果てしなく広がり、波と風の音だけが響く。ランチにもディナーにも最高の場所で、町で一番のマルガリータを楽しむことができた。覚えている人もいるかもしれないが、以前は黄色い2階建てバスが置いてあり、ホットドッグスタンドとして使われていた。

ただ、そんな理想的な場所にも試練はあった。最大の敵は天気だった。天気が荒ればすべてが止まる。海が僕たちのその日の動きを決めた。年月を重ねるうちに、数えきれないほどの嵐が通り過ぎ、そのたびに爪痕を残し、僕たちの忍耐を試した。

僕は以前、サーファーズの下の浜辺に建てたデッキにシーカヤックを置いていた。ある夏、強力な台風が近づいているというニュースが流れ、それを聞いた僕たちはすべてを固定しに急いだ。サーフボードもSUPも。僕はカヤックを砂の上の木製デッキにしっかりと縛りつけ、これで安心だと思っていた。だが翌朝戻ると、景色はまるで別のものになっていた。波があまりにも強く、僕のカヤックだけでなく、それをつないでいたデッキごと消えていた。まるで海が「もともと自分のものだ」と言って取り戻したかのよう。

サーファーズでは生放送のラジオ番組、バンドのライブ、ディスコナイトまで開催された。あるときは、インドのゴアにあるアンジュナビーチのフルムーンパーティをヒントにして、巨大なスピーカーを海に向けて置き、ピンクフロイド、グレートフルデッド、ボブ・マーリーを流した。すると、女性たちのリクエストで途中からディスコナイトに変わった。

ここで演奏したアーティストは本当に多い。かまやつひろし、南佳孝、ブレッド&バター、平井 大、Keison、ザ・テストライダーズ、IZAWA BAND、沼澤 尚、小

沼ようすけ、カイ・ペティート。ハワイからもカアウ・クレーター・ボーイズのアーニー・クルーズ・ジュニアをはじめ、多くのミュージシャンがステージに立った。屋外デッキでは、フラやヨガ、カントリーダンスのイベントも開催された。

遠方の街から来た人たちは、本物のサーファーたちが水着やウェットスーツ姿のままサーフボードを抱えてビーチから上がってくる姿に驚いたはずだ。ある日はトム・カレンがSUPで波に乗り、別の日にはクリスチャン・フレッチャーが父のハービーと一緒にいたりもした。オーストラリアのレジェンドサーファー、マーク“オッキー”オクルーボも最近、ここでインタビューを受けた。ほかにもアレックス・ノスト、シェイン・ドリアンなど多くのサーファーたちが訪れた。リッチ・パベル、ベン・ウェイ、川南 活、富永忠雄といったシェイパーたちもよく顔を出していた。写真家の横山泰介も常連で、多くの雑誌記事やラジオ番組の拠点としても使われていた。そして、今では著名なアーティスト花井祐介。彼はザ・ロード&ザ・スカイのメニューを最初にデザインし、世界的に知られるようになってからも、ずっとサーファーズにアートを提供しつづけてくれた。

冬の寒い日には、ナルがデッキの廃材を使って大きな焚き火を起こす。僕たちはその火を囲み、ドリンクを手に暖をとりながら、あの変わらないコミュニティのぬくもりを感じていた。

ナル、すてきな奥さんのサユリさん、美しい娘のユイちゃん、そして長年僕たちを支えてくれたすばらしいスタッフのみんなに心から感謝したい。

「GOLDEN ERA(黄金時代)」は終わった。でも、その輝きは僕たちの心の中で、これからも永遠に生きつづける。●